

2025年11月の総評に代えて

○ 林 桂 ○

● azusa ●（京都府 24 歳）

紙パックのコーンスープを
鍋にそそぐ
音だけがする世界で暮らす

【評】自分が出す音だけがある世界。一人暮らしの場面。どこでもその場面を切り取ることができるが、紙パックのコーンスープを鍋に移して温める場面を取り出す。その取り出し方に様々な思いがついてくる。

● 睦月 雪花 ●（愛知県 37 歳）

北欧の森のどこかにリスたちが
埋めてわすれたいくつかの恋

【評】北欧の森のリスは、どこか童話めいているが、「いくつかの恋」の遙か性を伝える。リスは食糧を蓄えるが、「わすれた」ままになったものもあるだろう。これも遥かな恋らしさを生む。

● 絵巻 ● (東京都 63 歳)

冬の月ひたひたひたと寝に帰る

【評】「ひたひたひた」のオノマトペが印象的だ。忍者のように、人に気づかれない歩みだ。一日の終わりの疲労感を静かに伝えている。

● 古倉 凧紗 ● (広島県 34 歳)

この町はほとんどしかくでできて
いて遠心力でふくらむカーブ

【評】確かに人間の作るものは角張っている。家も道筋も敷地もほとんど四角。その中に曲線を描くカーブは思いあまった「遠心力」の悪戯のように見える。

● 戸倉田面木 ● (静岡県 27 歳)

ちりちりと等速に降る初雪に
きづかず祖母は新聞をよむ

【評】雪の降り方を「ちりちり」と表現するのは目新しい。かつ降り方に「等速」を見いだしている。新聞を読み続ける祖母は、周りの気候の変化に頓着しない。自分の新聞の世界に没入する。老年を生きる人間の典型的な側面を描いているようである。

● タルミフミヤ ● (東京都 22 歳)

くりかえす
雪を
死を
いとぐるまは

【評】糸車を引く日常をタテ糸にして、世界を見ているのだろう。営々と糸車は紡ぎ続けられる。横糸の雪の季節も、何代の人々の生死も越えて。現実的には糸車を引くことは殆どなくなった。だからこそ、継続的な日常のシンボルとしてイメージを喚起するのには効果的なものかもしれない。

● 曾我 門出 ●（新潟県 47 歳）

骨二百六個を納め終えた日の
口座解約の朱肉あざやか

【評】「二百六個」は、人間の骨の数である。納骨をして、その人の口座の解約手続きをする。その書類に朱肉の押印をする。最後の「あざやか」に人の死を受け止める万感が込められているようだ。

● 加那屋こあ ●（東京都 54 歳）

冬の浮力

鬱

雨

【評】「鬱」「雨」となれば、「浮力」よりも「沈降力」が勝る。しかも「冬」。これも浮力よりは沈む力が想起される。しかし、「鬱」「雨」と沈むさまに低く配字されることで、それが結果として「冬の浮力」を浮き上がらせている。

● 塩本抄 ●（石川県 37 歳）

梨のみず持て余しつつ
ゆっくりと
星の発酵してゆく暮らし

【評】「みず持て余しつつ」は、梨を食べるときの手元を伝う果汁の様子だろう。果物の中でも、梨の果汁は際だっている。「星の発酵してゆく暮らし」には、ゆっくりとした穏やかな日常が投影されているのだろう。

● みやこ たまち ●（静岡県 56 歳）

初冬の水路にずっと空がある

【評】農業用の水路か、工業地帯の水路か。人工的に作られた水路はまっすぐ延びている。そこに水路の果てまで、冬の空が映っている。もの寂しい風景だ。水路が空の一部を真っ直ぐに切り取っている。自然と人工物の出会いに寂寥感が生まれる。